

万葉集の「相」字について

——正訓字と訓仮字の間——

秀 島 美 穂

はじめに

万葉集中「相」字は四九八例（注）を数え、その用法は多岐に亘る。別けても動詞「あふ」に用いられた例が二九八と最も多い。現代の言語感覚からすると「あう」の正訓字として思い起こすのは、まず「合」や「会」であり、場合によっては「逢」「遭」「遇」等である。「相」字から「相談」「人相」「宰相」等の語を連想する事はあっても、動詞「あう」を即座に思い浮かべはしないだろう。ところが万葉集では他の字に比して「相」が圧倒的に多く「あふ」として現れ、その傾向は特定の歌人に偏らない。（故に本稿では万葉集全般的の傾向を見ることとし、敢えて人麻呂歌集歌・作歌を区別しない。）

言うまでもなく正訓の定着があつて初めて借訓に應用できるのである。「相」がアフの借訓表記だとしたら、その前提となつ

た正訓は何に由来するのであろうか。また、幾つもある他の正訓字に抜きん出て使用頻度が高いのは何故なのか。本稿では「あふ」の用字として「相」が選ばれた理由を考えてみたい。

一

第一に漢語本来の「相」の義を確認しておく必要がある。他の正訓字についても併せて見ておこう。日本の字書から繙いて行くと『篆隸万象名義』には（反切は省略。傍線秀島）「相助也 擇也治也導也教也」「合亂也答也成也口也」「會計也合也集与也」「逢遇也迎也大也見也相遭也」「遭還行也遭家不造遇也」「遇見也偶也選也逢也遇也」とあり、『新撰字鏡』には「相 正 視也 質也向也背也 借 助也輔也」「合 正 同也亂也答也對也成也 借 旬也會也」「會 正 集也聚也對也 借 与也最也合也申也 道也皆也」「遭過也」「遇見示也偶値也選也逢也」とある。中国

の字書では「爾雅」に「相視也」「合會對也」「會合也」「逢遇也」
「郭璞注」謂相遭遇「逢遇遡也」「郭璞注」轉復爲相觸遡「逢遇遡見也」「郭璞注」行而相值即見」とある。「万象名義」にこそ載っていないものの、「相」字に「視」の意のある事は万葉の宮廷官人ならば周知であろう。そして「合」「會」の二文字、「逢」「遭」「遇」の三文字がそれぞれ類義語である事も分かる。特に「逢」「遇」に「見」の意がある事は注意される。

漢籍において「相」が「みる」義で用いられた例を幾つか挙げておこう。

相彼鳥矣 猶求友聲 矧伊人矣 不求友生

〔詩經〕小雅／伐木

相時而動 無累後人

〔春秋左氏傳〕隱公二年

以相民宅而知其利害〔鄭玄注〕相占視也

〔周禮〕地官／大司徒

呂公者好相人 見高祖狀貌 因重敬之 引入坐……呂公曰

臣少好相人 相人多矣 無如李相 〔史記〕高祖本紀

中でも後の二例は「占視」の意である。「相」はただ「みる」のではない。『説文解字』は「相省視也」としており、「省」も「視」も『万象名義』に「察也」とある。故に「相」は洞察に通ずる行為であり、人に対して用いられる時は「うらなふ」義の方が強く出る。それにしても「みる」としての用例は助字としての用例に比べ微量と言って良く、寧ろ助字として「合」「會」「逢」「遭」「遇」等と共に現れる用法が目につく。

君臣相合 天下翕然 〔後漢書〕朱樂何列傳／何敞

特相會 往來稱地 讓事也 自參以上 則往稱地 來稱會

成事也 〔春秋左氏傳〕桓公二年

掖庭聘絕國 長門失歡宴 相逢詠藥蕪 辭寵悲團扇

〔文選〕和王主簿怨情詩／謝眺

今日相遭 眞解瞭矣

〔後漢書〕儒林列傳／張玄

有美一人 清揚婉兮 邂逅相遇 適我願兮〔毛傳〕邂逅不

期而會 〔詩經〕鄭風／野有蔓草

等である。「相見」も珍しくはない。

死喪無日 無幾相見 樂酒今夕 君子維宴

〔詩經〕小雅／頍弁

諸侯未及期相見曰遇 相見於卻地曰會 〔禮記〕曲礼下

天子召見三人 謂曰公等皆安在 何相見之晚也

〔史記〕平津侯主父列傳／主父偃

而我在萬里 結髮不相見

〔文選〕雜體詩／李都尉「陵」從軍／江淹

など、漢語「相見」は日本語「あふ」に近い意味を持つと思われる。「対面する」意の「見」は「まみゆ」と訓じられる場合がある事からも明らかのように、「拝謁する」「召し寄せて会う」と言った非常に改まった行為であるが、程度の軽重はあったようにで相聞的な用法もない訳ではない。少なくとも万葉歌に六一例を数える「相見」——日本語では「あひみる」と訓まれる——の用字は漢語「相見」と結びついたものであろう。

万葉集での用法は後に譲るとして、各字義の相違について考えるために「合」「會」「逢」「遭」「遇」の漢籍における実例をもう少し見ておこう。まずは単独例として、なるべく意味合いの異なるものを選んだ。

發蘋草以潛魚 豐圃草以毓獸 制同乎梁鄒 誼合乎靈囿

〔文選〕東都賦／班固

時黃祖太子射 賓客大會

〔文選〕鸚鵡賦／禰衡

壁壘天旋 神扶電擊 逢之則碎 近之則破

〔文選〕羽獵賦／楊雄

歷七邑而觀覽兮 遭鞏縣之多艱

〔文選〕東征賦／曹昭

卒然遇軼才之獸駭不存地犯屬車之清塵 輿不及還轅

〔文選〕上書諫獵／司馬相如

それぞれ「適う」「宴會する」「当たる」「通る」「たまたま出会う」と言った意である。だが、元々基本的な字義が重なっているため、区別して訳すのが困難な例の方が多い。それは併用例（熟語を含む）を見れば明らかである。

意者且運朝夕之策 定合會之計 使存有顯號亡有美諡

不亦優乎 〔文選〕答賓戲／班固

君若清路塵 妾若濁水泥 浮沈各異勢 會合何時諧

〔文選〕七哀詩／曹植

皇晉邁陽九 天下橫雰霧 秦趙值薄蝕 幽并逢虎據……

雖無六奇術 冀與張韓遇 寧戚扣角歌 桓公遭乃舉

〔文選〕雜體詩／劉太尉〔琨〕傷亂／江淹

遭逢聖明后 來棲桐樹枝 〔文選〕古意贈王中書／范雲
昔賢者之未遭遇也 圖事揆策 則君不用其謀……及其遇明
君遭聖主也 運籌合上意 諫諍則見聽

〔文選〕聖主得賢臣頌／王褒

遭時難 遭時匪難 遇君難……千載一遇賢智之嘉會 遇之
不能無欣 喪之何能無慨 〔文選〕三國名臣序贊／袁宏
千載一逢 再造難答〔李善注〕東觀漢記太史官曰耿況千載
而一遇者也 〔文選〕到大司馬記室牋／任昉

誠千載之嘉會 百世之良遇也 〔文選〕博奕論／韋曜

特に江淹の雜體詩は一首中に「あふ」意の漢字が五種類も使用されている。字義によって嚴密に使い分けたと言うよりも、類義の文字を多彩に織り交ぜる技巧であろう。

本章の最後に、万葉集散文部分における各字の使用例を挙げ
ておく。

〔相〕——四七例

〔A接頭辭三三例、B名詞一二例、C動詞「あふ」二例〕

〔A「相換」二六、一七六三、二六三四左 〔左〕は左注〕

〔相替〕一三九、三八六九左、四三二一、四四三六題 〔題〕は題詞〕

〔相違〕四三七、一六六七左、四二二八題

〔相送〕五六七左

〔相別〕一四〇題、六一〇、三八一〇、三九九〇左

〔相去〕一〇三〇左

「相問」六四九左／「相聞」七二七題

「相見」六六七、三八五七左

「相視」三八〇四題

「相談」六六七左／「相傳」八一三題

「相遇」八五三遊於松浦河序／「相畢」八九七沈痾自哀文

「相催」八九七沈痾自哀文／「相誘」九六二左

「相軒」九〇左

「相敵」三七八六題／「相害」三七八六題

「相推讓」三七九一題／「相歡」三九六〇題

「相招望野」三九七六題

B「内相」四四八七左、四四九三、四五二四題

「相撲」八六四、八八六題

「相人書」八九七沈痾自哀文／「丈部川相」四三二四左

「相坂山」一〇一七題

「相模國」三三七二、三四三三、四三三〇左

「相馬郡」四三九四左（地名人名は表音表記）

C「大伴宿禰三依離復相歡歌一首」六五〇題

「為向京之時見貴人及相美人飲宴之日述懷儲作歌二首」

四二二〇題

題詞であるため付訓せぬものもあるが、訓を付す場合にはCの二例を動詞「あふ」として訓む注釈書が多い。^{注五}「相」を「あふ」に用いる事は、散文部分では異例である。語順からして和文体と言える前者が「あへる」「あふ」などと訓まれるのはやむ

を得ないかもしれない。しかし、後者については「見」に対する変字法で「相」を用いただけで、意味する所は同じと解釈する事もできよう。また『古典集成』のみ卷一七・三九六〇の「相歡」を「あひてよろこぶる」としているが、やはり接頭辞と取るべきだろう。しかし、これらの「相」を動詞「あふ」として認めるならば、散文中に訓仮字が混入したと言うよりは正訓字に準ずる文字として、歌集内で通用していた可能性もあるこのような現象は『古事記』や『日本書紀』等、通常の散文ではあり得ない。

〔合〕——一〇例（以下の文字については地名、人名を除く）

「天皇合八田皇女」九〇左／「假合」八八六題、八九七詩題／「合一百廿斤也」八九七沈痾自哀文／「合歡花」一四

六一左／「於理不合也」三三六一左／「白合花縵」四〇八

六題／「即合出之」「不合弃之」四一〇六題（この二例は助

字）／「論時合理」四一三三題

〔會〕——一七例

「御齋會」一六二題／「不會此喪」四六一左／「後會相聞

往來」七二七題／「申宴會也」八一五題／「歎彼會難」八

七二題／「此日會集衆諸」九六二左／「嘆彼難會」九六六

左／「帥家集會」一五二六左／「耀歌會」一七五九題／

「會期無日」三八〇四題「是會集之中」三八〇八左／「諸

人多集此會」四〇七一左／「諸僚會少目秦伊美吉石竹館」

四〇八六題／「會集介内藏忌寸繩麻呂之館」四二三〇左／

「會集于守館」四二三八題／「新嘗會」四二七三題／「仁王會」四四九四左

〔逢〕——四例

「未逢良信」二二六左／「若逢聖醫神藥者」八九七沈痾自哀文

「權逢」一八八六題／「偶逢神仙」三七九一題

〔遭〕——三例

「偶遭良匠」八一〇題／「遭此重疾」八九七沈痾自哀文

「忽遭逆風」三六四四題

〔遇〕——七例

「邂逅相遇貴客」八五三遊於松浦河序／「此遇馮馬子」、「人

遇疾病」八九七沈痾自哀文／「遇病長逝焉」一四七二左／

「忽遇鬼病」三六八八題／「夫君難遇」三八五七左／「適

遇於越前國掾大伴宿祢池主之館」四二五二題

以上五文字については漢語としての用法から大きく外れるものはないと思われる。

二

問題となる字の漢語本来の用法が確かめられた所で、日本語との関わりを考えて行こう。「相」字の万葉歌中における用例を分類するとおおよそ次の通りである。

①接頭語「あひ」として——九五例

(A「あひみる」六一例、Bその他三四例)
A「あひみる」

Bその他

「あひあらそふ」「相諍競」一三三

「あひいひそむ」「相言始」二六八〇「相云始」三一一〇

「あひおもふ」「相念」六〇八、六一四、六一五、七九一、

一九三四、一九三六、二〇九四、二七三六、二九三三、

三〇五四、四二一五(波線は「相不念」)／「相思」七七

二(「相志思」と強調が入る、二五三四、二五八九、二七〇

九異伝、三三四三、三三五九(波線は「相不思」)

「あひさかゆ」「相左可延」四二七三

「あひしる」「相知」四九四(相^{あひしる}令知)

「七二〇」「相三」、二五六五「相視」、それ以外は「相見」八一、二二二、二二四、三〇〇、三〇九、四四七、五八六、五九九、六一二、六四八、六五四、六六六、七〇一、七〇三、七一〇、七四四、七五〇、七五一、七五三、七五六、一五五八、一六一九、一八八一、一九〇九、一九二一、一九三二、二〇二二、二〇二四、二〇四二、二〇八七、二二四五、二三四二、二二九二、二四四九、二四五〇、二五三九、二五六五、二五六七、二五七六、二五七七、二五七九、二五八三、二六〇五、二六一四、二六三二、二六七六、二八九九、二九三〇、二九六〇、二九六六、三〇〇一、三〇〇六、三一四一、三一五一、三二五〇、三七九二、三八一二、三九七八(一首中に二例、三九八二、四二四八(波線は「相不見」と「不」が間に入る。))

「あひとふ」「相問」四二八二

「あひとよむ」「相響」一六〇二

「あひとぶらふ」「相詛」一七四〇

「あひのむ」「相飲」九七三、四二六四

「あひぬ」「相宿」三〇〇〇

「あひまく」「相卷」一四一四

「あひむきたつ」「相向立」一五一八

「あひよばふ」「相結婚」一八〇九

「あひよる」「相依」二五〇六

「あひわかる」「相別」八九一異伝、一四五四

②補助動詞「あふ」として——九例

「しぐひあふ」「四具比相」三八二一

「ながれあふ」「流相」八二

「なびきあふ」「靡相」一九四、一九六、一三八〇

「よりあふ」「依相」一六七、二四五、二七八七／「縁相」五二二

③継続反復の接尾語（動詞語尾）として——一一例

「いろづかふ」「色付相」二二五三

「かたらふ」「相語」二七九九、三二九九

（漢文助字的用法だが不読。二字が一体となって「かたらふ」を表すと見る。）

「さらふ」「霧相」八八、一二三一、一八三三、二三四五、三二六八

「くもらふ」「陰相」二三二二

「みなぎらふ」「水霧相」一四〇一

「わたらふ」「渡相」一三五

④複合動詞として——五例

「かづきあふ」「潜將相」三八六九

「ゆきあふ」「去相」五四六／「行相」二二一七、二九四六

「射行相」一五七二（「い」は接頭語）

⑤動詞「あふ」として——二九八例（A自動詞、B他動詞）

A 一四、三一、六〇、一二五、一四〇、一四八、一九四、一九五、二〇七、二〇九、二二〇、二二三、二一九、二三五、二六七、二八四、三一〇、三七二、三七九、三八〇、四一七、四二七、四九六、五〇八、五一三、五三三、五三八、五三九、五四〇、五四一、五四二、五五〇、五五二、五五八、五六二、五六三、五六五、五七三、五九二、六〇四、六〇五、六一一、六一六、六二〇、六二三、六二四、六六一、六六四、六六七、六六九、六七四、六七六、六七八、六九九、七〇八、七三〇、七三三、七三九、七四〇、七四一、七四七、七六三、七六八、七七〇、七七五、七八三、七八五、九五三、九九三、九九六、一二五六、一二七九、一二八七、一三四三、一四〇〇、一四一〇、一四三〇、一四三六、一四六四、一四八一、一四九二、一五二六、一五三六、一五七四、一五七七、一五九〇、一六一三、一六六二、一六九二、一七〇〇、一七三一、一七三九、一七四〇、

一七六二、一七八九、一八八六、一八九四、一八九五、一九〇四、一九二七、一九四七、一九六九、一九七九、一九九五、二〇一二、二〇一七、二〇二〇、二〇二五、二〇二八、二〇二九、二〇三三、二〇四〇、二〇六〇、二〇七九、二〇八〇、二〇八七、二〇九二、二〇九三、二一二〇、二一二六、二三四四、二二七二、二二八〇、二二八六、二二九六、二三三三、二三五八、二三五九、二三六五、二三六六、二三七五、二三九三、二三九五、二四〇二、二四一九、二四二二、二四二八、二四二九、二四三一、二四三三、二四四八、二四五二、二四五九、二四七四、二四七七、二四七九、二四八七、二五〇五、二五〇八、二五一一、二五二四、二五四四、二五五七、二五六一、二五九一、二六一四、二六一八、二六一九、二六二五、二六二九、二六四一、二六五〇、二六六二、二六九〇、二六九五、二六九九、二七〇五、二七〇七、二七一六、二七一七、二七三〇、二七三一、二七四五、二七四七、二七五〇、二七五三、二七五六、二七六〇、二七八九、二七九四、二八一〇、二八一三、二八四六、二八四七、二八四八、二八五〇、二八五四、二八五六、二八五七、二八六八、二八六九、二八七一、二八七二、二八七九、二八八一、二八八二、二八八八、二八八九、二八九二、二八九五、二九〇三、二九〇四、二九一〇、二九一六、二九一九、二九二〇、二九二二、二九二三、二九三二、二九三八、二九四一、二九四四、二九四

九、二九五四、二九五七、二九五八、二九五九、二九七〇、二九七六、二九七八、二九八〇、二九八一、二九九一、二九九四、二九九五、二九九八、三〇〇六、三〇二九、三〇三七、三〇四〇、三〇五三、三〇五六、三〇六三、三〇六四、三〇七三、三〇七六、三〇八二、三一〇一、三一〇三、三二〇四、三二〇五、三一〇七、三一〇一〇、三一〇三、三二一四、三一〇六、三一〇二、三一〇四、三一〇七、三一〇七、三一〇八、三一〇九、三二一四、三二一六、三二二二、三二四二、三二六七、三二七七、三二八〇、三二八一、三二八八、三二八九、三二九〇、三二六一、三二六六、三二七六、三二八〇、三二八一、三二八三、三二八七、三二八九、三三三〇、三八三四、三八七五、三八八九、三九三三、四一一五、四一六八、四一九八、四二二五、四二五三、四二七九

B 一四六五（紙面の都合上一首中複数例、異伝等注記せず）
⑥その他の動詞として——六例

「あそふ」「相捨」一三／「相競」一九九／「相争」一八六九、四二二一（何れも漢文助字的用法だが不読。「かたらふ」同様二字で「あそふ」を表すと見る。）

「いはふ」「石相」三二八四（明らかに字義とは無関係な借用用法）

「うらなふ」「占相」^{用法}二五〇七（二字熟語で「うらなへば」と訓む。）

⑦連語「さにつらふ」として——四例
「狭丹頰相」四二〇、五〇九／「散頰相」二五二三／「散

釣相「三三七六」(「さ」は接頭語、「に」は「丹」と一般に説かれるが、「つらふ」については未だ定説を見ない為、ここは訓仮字と取っておく。)

⑧副詞「あふさわに」として——二例

「相佐和仁」一五四七／「相狭丸」二三六二

〔時代別〕『日国』等、逢フサキルサのアフサに、アワツ・アワタシのアワを語幹とする副詞アワニがついた複合語で「逢うとすぐに」の意から「軽率に」「たやすく」の意を表すようになったという説を挙げる。

⑨名詞として——一三例

「相坂」三三三八／「相坂山」二二八三、三三三六、三三三七、三三三〇

「相市乃花」一九七三／「相海」三一五七、三三三七

(傍線は「我妹子に」「をとめらに」等の序を持つ。)

「相模治」三三七二／「相模祢」三三六二

「相樂山」四八一

「七相萱」四二〇／「三相」五一六(みつあひ)は糸の縫り方。糸を三本合わせてより丈夫に言う。)

⑩枕詞として——六例

「味澤相」一九六、九四二、一八〇四、二五五五、二九三四

四(「あぢさはふ」は語義に未だ定説を見ない。ここは訓仮字と取っておく。)

「花散相」三六(「秋津」に掛かる枕詞だが、語構成的には

継続反復の接尾語に分類できる。)

⑪難訓箇所——二例(本稿では考察の対象から除外)

九、二二二三

これらの中で「相」の正訓用法と言えるのは接頭語「あひ」、動詞「うらなふ」である。更に「字訓」としての定着度を考えると「あひ」と「うらなふ」では用例数からして圧倒的に前者が優勢である。漢字「相」は「廣韻」下平聲に「相共供也瞻視也」、去聲に「視也助也扶也」とあり、助字は前者の用法となる。「共に」という義を介して助字としての「相」と接頭語「あひ」が結びついたのであろう。ならば補助動詞「あふ」についても「共に」「互いに」のニュアンスから正訓の範疇に入れて良いと思われる。漢語の助字「相」も日本語の接頭語「あひ」も「一緒に」「する」意が薄れ、単なる強調としての用法が出て来るが、それは結果であって元々は「共に」の義で繋がったのであった。万葉歌中で「相」字が用いられた日本語を見渡すと、動詞「あふ」とそこからの派生語が多い事に気づく。『時代別国語大辞典上代編』は動詞「あふ」について「二つ以上のものが一緒になる」意であるとし、その下位分類として「①合う。集合する。」「②逢う。出合う。遭遇する。」「③結婚する。夫婦関係を結ぶ。」「④戦う。あらそう。」「⑤二つのものがともにする動作であることを示す。a 補助動詞として用いられる場合。b 接頭語として用いられる場合。」と項目を立てている。

ここで最初の問題に立ち返ってみよう。「相」の正訓用法と

してまず定着したと思われる接頭語「あひ」と補助動詞「あふ」の根は一つであり、これらの正訓表記「相」が動詞「あふ」に溯つて転用されたのではないだろうか。つまり「あふ」の一部を指す文字が、逆に全体を代表する形で用いられるに至つたと考えるのである。

「相」字が「共に」「互いに」の義から逸れ、動詞「あふ」やその関連語の表記にまで広く用いられるようになったのは、無論借訓用法と言うべきである。しかし、表音面からだけではこれ程強固な結びつきが生じるものだろうか。そこに正訓とは言えないまでも、何らかの意味的繋がりを想定してみるのには寧ろ自然な方法と思われる。矢嶋は懷疑的であつたが「相手を見る」とに執する古代の恋愛のありよう（「人麻呂歌集略体表記の表音的側面」）をもっと考慮して良いのではなからうか。「目にはみれども あふよしもなし」のような表現から「みる」と「あふ」がイコールではないと言う事は確かだが、

二六一四 眉根搔 下言借見 思有尔

去家人乎 相見鶴鴨

或本歌曰 眉根搔 誰乎香将見跡 思乍

氣長恋之 妹尔相鴨

一書歌曰 眉根搔 下伊布可之美 念有之

妹之容儀乎 今日見都流香裳

二八八一 立而居 為便乃田時毛

妹尔不相而 月之經去者

或本歌曰 君之目不見而 月之經去者

の如く「みる」と「あふ」が近似して現れる例もある。「相」字は「あひ」「あふ」という訓みと、「互いに」「みる」という字義の両面から動詞「あふ」と極めて結びつき易い位置にあつたと考えるのではなからうか。

付け加えるならば、万葉歌中の「相」は動詞「みる」として用いられた例が一つもない。私はここにも意図的な書き分け意識を感じる。歌集内における「相」——「あふ」と「見」——「みる」の完全な棲み分けである。倭歌において「相」が単独で表す動詞は「みる」ではなく「あふ」なのだ。「霞」「乍」「迄」等、万葉集には他にも漢語本来の意味とは違つた日本語特有の意味・用法で定着した漢字がある。動詞「あふ」としての「相」もそうした用字の一つなのではないだろうか。第一章末尾で、六五〇と四一二〇の題詞に現れた「相」を動詞「あふ」として認めるならば、散文中に訓仮字が混入したと言うよりは正訓字に準ずる文字として、歌集内で通用していた可能性もあると述べたのはこういう事である。

むすびに

万葉人は日本語の動詞「あふ」に相当する漢字「合」「會」「逢」「遭」「遇」を知りながら、一首の文脈に即した「あふ」の意味合いを各字義によつて厳密に書き分けようとせず、殆ど「相」字を用いて來た。その姿勢は確かに「あふ」に関して書

き分けを放棄し、共通字を選んできたと言える。第一章で見たような漢籍における類義語の併用状況からして、厳密な書き分けなど困難なばかりでさして意味を持たないと、万葉人は合理的な判断を下したのかもしれない。

例えば万葉歌中「みる」に用いられた正訓字は「見」の他にも「視」「観」「看」「監」等幾つかある。しかし使用頻度からすれば「見」が他を圧しており、これらの候補の中では「見」が「みる」に最も相応しいと認められ、定着したと言えるだろう。だが、同様の事は「合」「會」「逢」「遭」「遇」の中からは起こらなかった。「あふ」として定着した共通字が、複数ある正訓字の何れでもなく「相」であったと言う事実は、表音性に優れる点のみならず、万葉人にとってそれだけ「みる」行為が「あふ」行為と根本的な繋がりを持って意識されていた事を示すと思われる。正訓字を以てしても埋められぬ漢語と日本語の溝を「相」字がカバーし得た面もあったのではないかと考え、「相」を正訓字と訓仮字の間に位置づけておく次第である。

注

(一) 総計五十二例のうち部立を示す「相聞」一四例を除いた数字である。用字の検索は塙書房『萬葉集CD-ROM版』(二〇〇二)によった。

(二) 万葉歌中、動詞「あふ」に用いられた「合」字は一〇例(七二三、一八〇九、二〇三八、二〇三九、二〇七六、

二三四五、二六五〇、二六五二、三〇〇〇、三〇一八、「會」字は一四例(三一異伝、七三七、一二〇〇、一九三〇、二〇四九、二〇五七、二六〇一、二九八八、三二〇三、三二五〇、三二八一、三二九〇、三二九七、三三〇三)、「逢」字は一三例(四二五、四八三、一五八九、一九〇二、一九四七、一九八〇、二〇六六、二〇七四、二四一三、二五〇七、二七二六、二七九二、三三三三)、「遭」字は三例(二七九三、一八〇五、二〇八九)、「遇」字は六例(五五九、七一二、一〇二〇・一〇二一、一七九二、一七九四、四二一四)である。

(三) 「相」字については矢嶋泉「人麻呂歌集略体表記の表音的側面」(『青山語文』二九号、一九九九・三)、「構文からみた人麻呂歌集略体表記——倒置的構文をめぐる——」(『上代語と表記』おうふう、二〇〇〇)、「人麻呂歌集略体表記の離陸——和語の語序に即して書くこと」(『書くことの文学』笠間書院、二〇〇二)等において、「春去」の「去」や「当」(「迎」)「経」(「触」)「秦」(「肌」)「依」(「因・由」)などと共に「より適切な文字による表意表記が模索されてよいにもかかわらず、借訓表記によって日本語を表す例」として挙げられている。

(四) 「遭家不造」は『詩経』周頌／旻予小子からの引用。
(五) 『校本万葉集』によると注釈書以前から六五〇については京大本に「離復相歡」(緒、三九五九については大矢

本に「相歡歌」と訓がある。四一二〇は写本の段階では訓がなく、「相の字は誤字か、又はあふとよまんか」と最初に指摘したのは『略解』である。六五〇を明確に接頭語として訓んでいるのは、管見では『新古典大系』のみ。四一二〇を「みる」意で取るのは「上京した時、貴人や美人を見て、宴会することがあらうと云ふので、予め作っておいた歌」と訳す折口「口訳」のみ。

(六) 「詡乃占相地勢 築營壁百八十所」(『後漢書』虞傳蓋臧列傳／虞詡) や「少好學 善占相之術」(『魏書』列傳／李先) 等の例がある。

※引用本文は、『詩經』『周礼』『礼記』『春秋左氏伝』『爾雅』は芸文印書館版『十三經注疏』に、『史記』『後漢書』『魏書』は中華書局版に、『文選』は芸文印書館版に拠った。

(ひでしま・みほ／本学大学院後期課程満了退学)